

## 教育の質保証のためのカリキュラムアセスメント実践に関する報告

ー教育ディベロッパーへのアンケート調査結果から見たメリットと改善点ー

Report on the Practice of Curriculum Assessment for the Quality Assurance of Education  
-Benefits and Improvements Seen from the Results of Our Survey of the Educational  
Developers-

教育開発センター※

### 1. はじめに

岡山理科大学では教育改善を継続的に実施する目的で機関レベル、教育課程レベル、授業科目レベルの3段階において学生の学修成果を評価し、学部・学科の教員が中心となって行うカリキュラムアセスメント(以下、CAとする。)は、教育課程レベルのアセスメントに位置付けられる。CAでは、卒業研究の成果、GPA、学位授与の方針(ディプロマポリシー、DP)達成度に対する学生の自己評価、免許・資格の取得状況、卒業後の状況などのエビデンスに基づき教育ディベロッパーを中心に学科内で検証し、学科の専門教育のカリキュラムと基盤教育センターが展開するカリキュラムについて議論し、それらのカリキュラムの良い点、改善点について自己点検・評価を実施して、教育改善のPDCAサイクルを回している。各学科で実施した自己評価を公表し、他者の評価を受けるCA・チェック(以下、CACとする。)も実施している<sup>1)</sup>。2020年度に受審した大学認証評価では、「教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。」の項目で「教育課程の改善のために、学修成果の評価に関する方針(アセスメントポリシー)を定め、教育開発センターと教育ディベロッパーによる協働体制のもとで、各学科や専攻がカリキュラムを自己評価したうえで、自己評価の結果が妥当であるかを他学科、他専攻の教育ディベロッパー等が評価するCACを行っている。」と優れた取り組みとして評価され、大学基準協会のホームページでは大学認証評価の基準4:教育課程・学修成果の大学の長所として取り上げられている<sup>2)</sup>。

また、卒業予定者アンケートにより「大学の満足度」については、良かったと感じた学生が2018年度80%、2019年度87%、2020年度91%と、この3年右肩上がりの結果となっており<sup>3)</sup>、これもCAの導入をはじめとして、3つのポリシーの見直し、シラバス記載内容の充実などの一連の教育改革による成果であると考えられる。

さらに、ビジョン2026の実現に向けた第2期中期計画案ではCA等の検証結果を活用して、学部・学科レベルでのカリキュラムや授業内容・方法等の改善サイクルを定着させること、2022年度から設置する新学部・コース、新研究科・専攻においては完成年度まで毎年CA等を実施し検証することなどの方針が打ち出される予定であり、今後、ますますCAが教

育改善のために重要な役割を持つものと考えられる。

以上のように大変優れた先進的な取り組みとなっている CA であるが、2018 年度から開始して 2021 年度で 4 回目を迎えるにあたり、実施している各学科の教育ディベロッパーを中心とする学科の教員から、あるいは、この取り組みを裏から支援する教育開発センター員の教員および教育企画課の職員には、多大な負担をかけているのも事実である。そこで、これまでの CA について総括するために教育ディベロッパーの教員を対象に 2021 年度第 3 回教育ディベロッパー研修会開催に合わせて CA に関するアンケート調査を行った。その結果に基づいて、CA と CAC の有効性と問題点について報告する。また、今後のより効果的な CA の実施方法や CAC の実施方法に向けての改善案を提案する。

## 2. アンケート調査

大学の学習管理システム LMS である mylog を利用して学科の教育ディベロッパーに対して CA に関するアンケート調査を行った。CA の実施する目的の中には、アセスメントをきっかけに学科教育やカリキュラム、授業について学科の教員間での議論の促進に活用することもある。もう一つに、教員目線ではなく、学生の学修成果を中心とした学科カリキュラムや授業改善の積極的な議論の促進とそれに基づく具体的な改善がある。各学科では当然のように毎年カリキュラム改善について議論していると思われるが、学生の成績や卒業時アンケートなどのエビデンスに基づいた議論を継続的に実施することが重要である。以上の点を踏まえてアンケート項目を作成した。

アンケート内容を以下に掲載する。

設問 1 CA の自己評価は、学科の教育(カリキュラム、授業や学生指導)について学科で**議論するきっかけ**になりましたか。

設問 2 設問 1 において、そのように考えた理由をお聞かせください。

設問 3 CA の自己評価を行うことで**学科の教育の長所**が明らかになりましたか。

設問 4 設問 3 において明らかになった学科教育の長所について具体的に書いてください。また、思わないと回答された方はその理由をお聞かせください。

設問 5 CA の自己評価を行うことで**学科等の教育の改善点**が明らかになりましたか。

設問 6 設問 5 で明らかになった改善点について、**学科のカリキュラムや授業などに反映**させることができましたか。

設問 7 具体的な改善点とカリキュラム等にどのように反映させたのかを具体的に教えてください。また、反映できなかった理由をお聞かせください。

設問 8 CAC における他者(他学科)からの評価は学科の教育改善に役立ったと思いますか。

設問 9 設問 8 において、そのように考えた理由をお聞かせください。

設問 10 CAC についてご意見・ご提案などお聞かせください。(例:開催方法、開催頻度(現在 1 回/年)、開催時期(現在 3 月)など)

### 3. アンケート調査の結果から見える CA、CAC のメリットと改善点

アンケート結果を図 1 に示す。2020 年度までに CA を実施したアンケート対象学科は 20 学科であるが、回答した学科は 18 学科であり、回答率は 90%であった。

設問 1(議論するきっかけ)では、CA が学科の教育改善のための議論のきっかけになったと回答した学科が、“大いにそう思う”と“まあまあそう思う”を合わせた学科の割合が 72%である。全く議論しなかった学科は 1 学科であり、多くの学科で教育改善の議論のきっかけになったことが分かる。設問 2 のきっかけになったと回答した理由として「CA のチェック項目について、評価を行わなければならなかったので、学科で議論するきっかけになった」、「科目の必修選択の妥当性や、クラス編成、開講期について活発な議論のきっかけ」など CA をするために学科内で詳細な事項について話し合いを行っている学科もあることが分かった。また、「学科のカリキュラムが学生にどう受け止められているかを議論するきっかけになった」というコメントからカリキュラム等の改善に学生の観点が追加されたことが伺える。学科独自で実施している「基礎学力定着度調査」の結果を学科教員で共有し、学生指導や今後の講義の方針や学科教育などを学科会議などで議論を行っている学科があった。このような前向きなアセスメントが無くても、もともとカリキュラムに関する議論を実施していると答えた学科もあったが、学生の学修成果などのエビデンスに基づいて議論をしていることを期待する。「きっかけとならなかった」との意見として「あまり議論する時間がなかった」との回答があり、学科で議論はしたが、さらに踏み込んで議論する時間が取れな

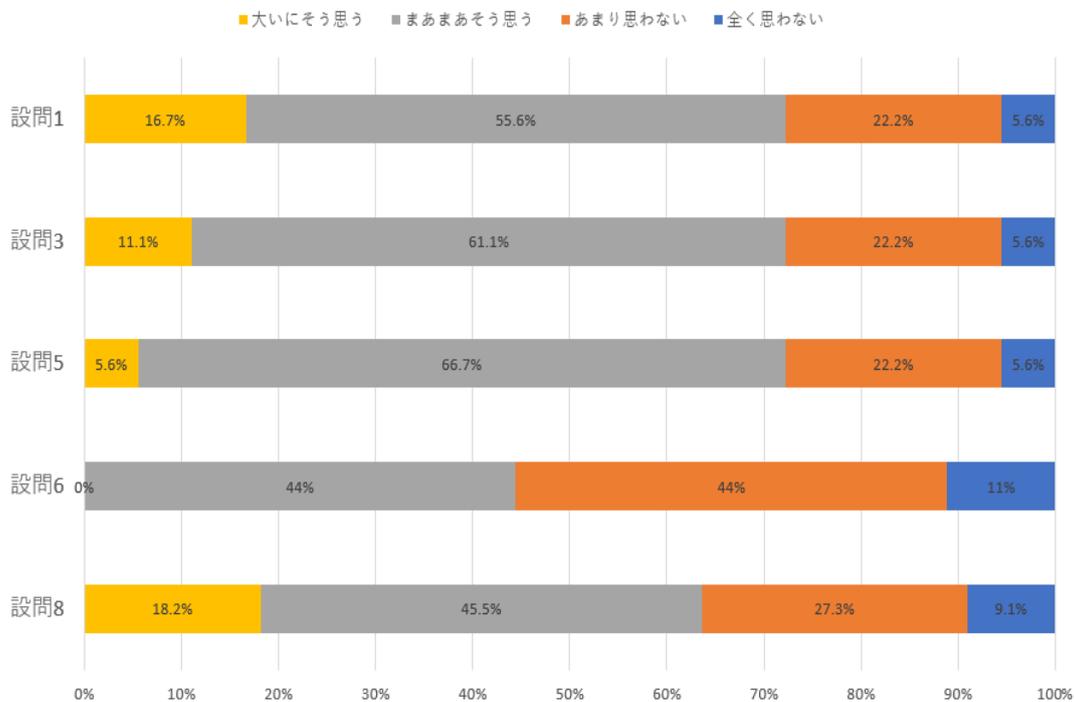


図 1 アンケート結果

かったことが伺える。

設問 3(学科の教育の長所)の結果は、大いにそう思う 11%、まあまあそう思う 61%と回答があり、72%の学科で長所が明らかになったことが分かる。設問 4 の回答で明らかになった具体的な学科教育の長所として以下のようなコメントがあった。

- 「良好なルーブリック評価から、高学年では視野が広がって、こうした科目にも積極的に取り組んでいる様子を伺い知ることができた」
- 「専門的知識のみならず、幅広い教養・学ぶ意義・表現力や情報活用能力・思いやりや多様性の尊重などが身についたと感じており、自己肯定感や思考力・判断力などにも一定の自信をつけている」
- 「卒業予定者に対して単位取得した科目の成績を評価したところ比較的高いものになっていること」
- 「学生が助け合いながら学んでおり、そのことが脱落者を減らし、卒業予定者アンケートで高い満足度を得ることができる要因である」
- 「卒業研究発表評価(10段階評価)で、平均 7.2 であり、専門分野に関する知識・理解、思考・判断・表現、関心・意欲・態度、技能に関する教育がある程度きちんと行えている」
- 「DP 達成度の自己評価は、毎年、ほぼ B 評価であり、ほぼ全学生が身につけられるカリキュラムとなっていることが確認できた」

など、学生の修学成果や卒業予定者アンケートなどのエビデンスに基づいて学科の長所が明らかになっており、CA がこの点においても役立っていることが分かる。また、学科の取り組みとして「教育システムの PDCA が絶え間なく回り続けている」とのコメントもあった。

設問 5(学科等の教育の改善点)の結果、大いにそう思う 6%、まあまあそう思う 67%と回答があり、73%の学科で学科教育の改善点が明らかになったことが分かる。

設問 6(学科のカリキュラムや授業などに反映)の結果、大いにそう思う 0%、まあまあそう思う 44%と回答があり、設問 5 で 73%の学科で改善点が明らかになったが、具体的にカリキュラムや授業の改善に反映するのは難しいことが明らかになった。

設問 7 から反映できた例として以下のようなコメントがあった。

- 「自己評価などを参考にカリキュラム改訂を行った」
- 「CA の結果などを議論した結果、選択科目に変更した」
- 「クラス編成と開講期を見直すことにより本履修クラスを少人数クラスに変更した」
- 「C. 関心・意欲・態度の領域に関わる科目が少ないことが明らかになり、C 領域に関わる達成目標に取り組む科目が増え、改善につながった」
- 「エビデンス収集の過程で、1 級建築士受験資格が得られていない学生、研究倫理教育が不十分(受講はしているが受講証が未提出)な学生がいることなど、履修指導等が不徹底であったことがわかり、改善するよう努めた」
- 「昨年からのカリキュラム改変時での学生の選択肢の確保等に検討するきっかけとなっ

た」

- 「これまでは3つのポリシーの整合性が不十分だったことが分かり、改善した」
- 「他学科の取り組みの中に自学科に取り入れるべき視点があって大いに参考になり、実際に導入を検討している」
- 「講義中心の学習を行なっているため卒業論文と卒業論文発表で改善を目指していく」
- 「卒業発表に関するルーブリックを作成し、統一的な基準で評価できるようになった」

などがあつた。CAによってカリキュラムの改善点を見つけて学生の教育効果を考慮して実際に改善していることが分かる。反映できなかった理由として、改組を控えて「学科会議で就職支援、授業改善等の共通理解を図ったが、具体的な改善策を提示することができなかった」「D: 技能については学生の満足度は低く、特に外国語によるコミュニケーションには苦手意識を持っていることが分かったが、実際にカリキュラムに反映することは難しい」、「教員に余裕がなく、あまり改善が図れなかった」というコメントがあり、改善点は把握できたが、具体的にカリキュラムの改善まで行かなかった学科もある。「カリキュラム変更の必要がなかった」というコメントからCAの結果、今のカリキュラムで問題なく学科教育が行えている学科もある。「CAの実施サイクルよりも、学科のカリキュラム変更のほうが早く行われ、活かすことが難しい」は、本来学科カリキュラムの変更は、一番に学生の教育効果を向上させることを目的としているので、CAの結果を考慮したカリキュラム変更を行っていただきたい。

設問8(他者(他学科)からの評価)の結果、大いにそう思う18%、まあまあそう思う46%と回答があり、64%の学科でCACにおける他者(他学科)からの評価は学科の教育改善に役立っていることが分かる。この設問については11学科から回答があつた。

設問9から役立った理由として以下のようなコメントがあつた。

- 「学科内には気付かないような意見や指摘があり、そういった点が役立った」
  - 「当日の準備や、教育システムの改善に対する努力をたいへん高く評価していただいたので、苦勞が報われた気がして、教員のモチベーションが高まった」
  - 「他学科の状況、教育の特徴などを知る機会となり、大いに参考になった」
  - 「報告自体は他学科の動向を知ることができるので、役に立つ」
  - 「『基礎学力度調査』は学科内で大いに役立っているが、他学科からの評価も高く、今後も継続して実施する1つの理由になる」
  - 「他学科との情報交換ができ、本学科のよさや改善点に改めて気づくことができた」
- など、教育改善について他学科の教員と日頃あまり話し合う機会がなく、他学科の取り組みや他者からのアドバイスが自学科の教育改善に対して新しい気づきを与えられていることが分かる。

また、役立たなかった理由として以下のコメントがあつた。

- 「他学科からの指摘は、CAにおける客観的評価方法に関するものがほとんどで、教育の内容にまで踏み込んだ指摘が乏しいため、教育改善にまではつなげにくい」

- 「なかなか欠点の指摘を行っていただくことは少なく改善に役立ったと言えるまでの取り組みにつながっていない」
- 「他学科からの評価を考えるとはないため」
- 「『評価』という名の単なる感想にならざるを得ないため、あまり有効性は無い」
- 「現在の相互評価は表面的な意見交換に終始している」
- 「他学科の初見の資料を短時間で見て、きちんと評価することは難しい」
- 「他学科からの評価についてはまだあまり多くの意見をもらえていない」

などのコメントがあった。これはCACの実施方法に問題があると考えられ、時間配分、グループ分け、話し合いの仕方などを改善する必要があると思われる。

設問10(CACに対する意見・提案)に関して回答されたCACの改善案(開催時期、開催周期なども含む)に寄せられたコメントを1)実施方法についての改善、2)開催時期、開催周期の改善、に分類して今後のCACの取り組み方について検討を行った。

#### 1)実施方法についての改善

自己評価に関して「A=100%達成であるため、かなりの達成度があってもBとなることから、評価自体は変化しない。AとBの間があってもよいかと思う」という意見があった。DPは卒業生全員が持つべき能力であるのでA評価が100%になるが、評価段階をもっと細かく設定し学科の教育改善の過程が見えるようにした方が学科のモチベーションが上がると考えられるので検討が必要である。また、「機構によるきちんとした運営を望む。学科に丸投げするのではなく、第三者=機構によるランダムな学生の抽出、企画者=機構による学生への趣旨説明、関係部署との連携など、やるべきことをきちんとやっていただきたい」との意見を頂いた。CA自体は学科主導で行うべきものであるが、教育開発センターとしても学科や基盤教育センターをしっかりと支援していかなければいけないと考えている。CA自体は、大学のアセスメントポリシーに基づいた教育改善のための取り組みであり、今後も継続する事業であるので、今以上に学科や関係部署と緊密な連携を取りたいと考えている。

カリキュラムコンサルティングに対して「4年次だけでなく3年次生も加えて先輩後輩間の意見交換の性格を持たせることで学生の「本音」をより引き出す工夫をする」との意見を頂き、コンサルティングの実施方法についても検討していきたい。

学生の学修成果に関するエビデンスの入手方法について「学科の全ての学生の成績の統計などが簡単に行うことができるようなシステムがあれば、まとめる負担が減り、たいへん助かります」、「CACに必要なデータを、ディベロッパーが参照できるようにしてほしい」などの意見があった。TCPには、学生の学修に関する情報をすべて統合して管理できるポートフォリオなので、TCPが完成すれば、このような問題は解決できると考える。

#### 2)開催時期、開催周期の問題

学科の教育ディベロッパーおよび学科教員がCA、CAC実施とその方法について、教育改善のための年間行事として慣れていただくために毎年実施してきた。2021年度で4回目を向

かえるにあたり CAC について実施周期と実施時期について学科の意見を拝聴して見直しを検討したい。「現行の開催時期は初回の年度の FD イベントカレンダーの都合で決まったもので、より効果的なアセスメントになるようスケジュールを見直すべきである」とし、「学生がインタビューに答えやすくするためインタビューの開催時期を卒業研究終了から卒業式までの期間」で「CAC はカリキュラム変更のタイミングに合わせて 5 月もしくは 6 月に行うなどを考慮すべきである」という具体的な意見を頂いた。また、時期については「年度末は忙しいので開催時期を 9 月上旬に希望」、「学年末に評価を行うことがスケジュール的にたいへん厳しいと思っている。学年末の成績もまだ出ていない時期であるため、成績や単位取得状況の評価もできない。夏など別の時期に行えるとよいかもしい」、「正確なデータが 4 月に入らないと揃わないようなので、開催時期は 4 月以降が妥当と思う」、「実施時期について、3 月に実施するのであれば、学生への聞き取りも 2 月頃で十分であろう」など変更を希望する意見と「現在の 3 月でよいとおもいます」という現行の時期でよいとする意見も見られる。実施周期についても現行の「開催頻度は年に 1 回でいい」と「毎年実施する必要はないと思われる」「頻度はこれまでより大幅に下げた方がよい」の変更を希望する意見があった。また、新学科開設に伴って「評価のみの報告とさせてほしい」という意見もあった。また、「現在のままでよい。他学科との情報交換の場になり、授業改善や学生支援の仕方等を学ぶことが多くあります」「大変重要ではあるが、現在、学内ではたくさんの学内改革が進行しており、正直、それについて行くのがやっとの現状なので、このシステムの定着化を図るためにも現在の実施方法をしばらく続けて欲しい」との意見もあった。

以上のように CAC 実施時期や実施周期については各学科で学科の事情に合わせて種々の改善案が提案されている。今後、教育開発センターと教育ディベロッパーが協議しながらより教育改善が促進され、効率の良い CA や CAC のやり方について議論していきたい。

さらに、基盤教育について、2020 年度は CA や CAC を試行的に実施したが、専門教育とともに大学教育の片輪を担っていることを忘れず、教育に関する自己評価とそれに基づく教育改善の PDCA サイクルを回す仕組みをつくることが肝要である。

#### 4. おわりに

本学の CA と CAC は第 3 期認証評価においても良い取り組みとして評価され、全国の大学に先駆けて実施されてきた。学生の学修成果のエビデンスに基づいた自己評価と教育改善の取り組みである CA は大学のアセスメントポリシーにも謳われているように全学科が毎年実施する必要がある。CA のねらいは、学科が主体となってエビデンスに基づいた教育改善の PDCA サイクルを回すことで、継続的な自己点検と改善をスパイラルアップさせることである。そして、このような活発な教育改善のために教員は議論し、改善の実現を目指していることを広く公表して、大学生とその保護者、さらに受験生とその保護者、他の大学関係者、地域の方々に広く知ってもらうことは、大学としての教育の質保証に対する説明責任である。CA、CAC を担当される教育ディベロッパーの教員には今後も学生の「学びの成長」を支

援するための教育改善にご協力をお願いする。

#### 参考文献

- 1) 山咲博昭・山口一裕・大山香織・重松利信・野間川内一樹・秦敬治: カリキュラムアセスメントの導入とその実践ー岡山理科大学の事例からー, 岡山理科大学教育実践研究, 第4号, 101-112(2021)
- 2) 大学基準協会 HP, 他学科・他専攻の評価や卒業予定者へのヒアリングを通じた教育課程の改善  
[https://www.juaa.or.jp/case\\_study/detail.php?id=85&page=1](https://www.juaa.or.jp/case_study/detail.php?id=85&page=1) (令和3年10月1日閲覧)
- 3) 2018年度、2019年度、2020年度卒業時アンケート調査結果, 岡山理科大学,  
<https://www.ous.ac.jp/outline/disclosure/research/> (令和3年10月21日閲覧)

※ 2021年度教育開発センター メンバー名

センター長: 山口一裕、センター次長: 浅野純一、荒木圭典、センター員: 猪口雅彦、上嶋明、大熊一正、河合史菜、河野敏行、小林忠資、坂口武典、重松利信、杉山正二、辻維周、野間川内一樹